

## 植物とともに — 牧野富太郎 —

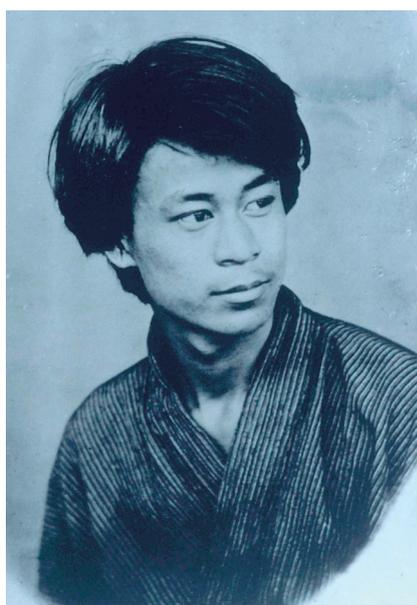
「植物はなんて美しいのだろう。こんなにかくさんあるのに、一つとして同じものはない。そして、生きていくための、すばらしい知えと工夫がつまっているんだ。」

1862年、高知県に富太郎は誕生しました。子どものころから草や花が大好きで、山に登っては一日中植物をながめたり、採集したりして過ごしていました。この少年が、後の「日本の植物学分類の父」牧野富太郎なのです。

子どもの頃の富太郎は、寺子屋などで勉強しながら、自分で植物の勉強を続けていました。小学校は入学して2年でやめてしまいます。教えられることが簡単すぎたのです。それからずっと富太郎は、山に出かけて植物採集をするなどして、自分で勉強をしていきました。

22歳になった富太郎は東京へ行き、東京大学理学部植物学教室を訪れます。そこでその実力を認められ、大学で研究ができることになりました。大学の先生たちは、学校にほとんど行っていない富太郎の植物の知しきに大変おどろき、親切にしてくれました。

「君は学校に行かずに、どうしてそんなに植物のことを知っ



ているのだね。」

「はい、私は小さいころから植物が大好きで、草花とずっといっしょにいました。わからないことは本を買うなどして、全部自分で調べてきたら、いつの間にかよく分かるようになっていたのです。」

「君の様な人は見たことがないよ。おもしろい。君はこの大学に関係ない若者だが、君ならいつでもこの教室に来ていいよ。ここにあるたくさんのお本も好きなだけ読んで、勉強しなさい。」

富太郎は植物を調べるだけでなく、調べたことを絵でまとめる練習も毎日続けていました。ていねいに細かく描き、こだわりぬいて研究結果を本にしました。

ねる時間は少なくなりますが、富太郎は大好きな植物の研究ができれば、それでよかったです。しかし、見事な仕事で富太郎が有名になるにしたがって、親切だった大学の先生たちとの関係がうまくいかなくなってきました。富太郎がライバルのように思われてきたのです。あるとき、富太郎

は大学の先生に呼ばれてこう告げられました。

「牧野くん、今度から私も君の作っているような本を作ることにした。だから君にはもう大学の本は貸せない。大学にはもう来ないでくれたまえ。」

「そんな、先生！植物の研究はぼくの生きがいです。どうか、この大学で勉強させてください！」



「もう決まったことだ。大学に関係ない君が、大学の本を使って研究すること自体、まちがっているのだ。」

こうして、富太郎は大学で研究することができなくなってしまいました。さらに、「まずしさ」がおそってきました。富太郎はお金のことは全く考えずに、研究のための本や道具をどんどん買うので、お金が無くなってしまったのです。

そんなとき、仲間や友人が富太郎をはげましてくれました。みんな、富太郎の力を知っていたので、もっと研究を続けてほしかったのです。そんな仲間のはげましや、支えてくれる先生があり、富太郎はついに帝国理科大学にもどることができました。今度は講師(こうし)として、働けるようになったのです。



大学で働くようになって、富太郎はずっとまずしさに苦しめられました。お金のことは気にしないで研究を続ける姿勢は生涯(しょうがい)変わりませんでした。

しかし、自分の全てを植物の研究にささげ、いつしか富太郎は日本だけでなく、世界にほこる植物学者になっていました。富太郎ほど日本の植物に詳しく、種類が分

かる人は少なかったのです。

また、富太郎は世界的な学者でありながら、たくさん外に出て、一般の人に植物のことを教えました。どんな人の、どんな質問にでも、にこにここと、ていねいに親切に答えるのです。

ある植物採集会で、少年が何かの植物を抜こうとしていました。

富太郎は

「やあ、やってるね。しっかりしつかり。」

と笑顔で近づき、一緒に引つ張ってあげました。そしてその植物を引っこ抜くと同時に、二人とも尻もちをついてしまったのです。富太郎は少年の頭をやさしくなでながら言いました。

「やあ、いい勉強をしたねえ、こんな砂浜に生えているのに、なんて強い植物だろうね。こんな何もないところで馬をつないでおくにはびったりだねえ。さあ、もうこの植物の名前はきつと忘れないよ。……。この草の名前は……。コマツナギ。」

1957年、94才の命を終え、富太郎は天国へ旅立ちました。それには多くの人が悲しみ、東大泉にある富太郎の家を、東京の宝として残そう、ということになりました。それが今の牧野記念庭園です。開園式は東京学芸大学附属大泉小学校の講堂（こうどう）で行われました。それには当時の附属大泉小学校の子供たちも出席し、富太郎の足跡を後世に残すことをちかいか合ったのです。

（野村 宏行 作）





【牧野富太郎（1862～1957）】

日本が世界に誇る植物学者。一生で集めた植物の標本は40万枚をこえ、1500種類以上の植物の学名（日本だけでなく、世界に通用する名前）をつけた。これは実に、日本の植物の1/4もの数になる。

# 植物とともに―牧野富太郎―

(中学年 1-(5))

## (1) ねらい

自分の特徴を知り、自分のよさを大切にしていこうとする心情を育てる。

## (2) 資料の特質

植物学者、牧野富太郎博士の生き方を資料化した。世界に誇る大植物学者の生き方にふれることで児童は命の輝きや生きる希望について感じていけるだろう。また、植物が大好きで、楽しみながら研究を続けていった姿勢や、感動すら覚える植物描写の技術など、自分の長所をとことん伸ばしていく生き方を児童に伝えられる。

## (3) 展開例

- 1 牧野富太郎博士についての理解を深める。
- 2 資料「植物と共に―牧野富太郎―」を読んで話し合う。
  - ①植物を眺める富太郎は、どんなことを考えていたか。
    - ・美しいなあ。
  - ②研究ができなくなって、富太郎はどう思ったか。
    - ・何とかして研究を続けられないか。
  - ③富太郎が大切にしていた自分らしさとは何か。
    - ・植物が大好きな気持ち。
    - ・研究をあきらめずに続けて、たくさんを知ろうとすること。
  - ④自分は富太郎のように生きたいと思うか。
    - ・同じように生きたい。好きなことを続けたいから。
    - ・同じようには生きたくない。自分はまずは弱点を直したい。
- 3 教師の説話を聞く。

## (4) 指導上の留意点及び工夫

自分とのかかわりで考えることを明確にさせるために、「自分はどうか考えるか」といった発問を主に授業を構成した。それにより、児童が真剣に、自分ごととして、自己の生き方を見つめることを期待している。また、中心発問は「テーマ発問」とし、資料全体から牧野富太郎らしさ、その生き方を感じられるようにする。

〔本文写真は高知県立牧野植物園提供〕